

探訪 北の風景 85

太平洋セメント上磯工場 北斗市

青木和弘

北斗市上磯の海岸から函館湾に突きだした海上
棧橋（さんばし）は2キロメートルに及ぶ。太平
洋セメント上磯工場から出荷するセメントや、運
び込む原料と燃料用石炭などを積み卸しするパイ
プ状のコンベヤーが2本通っている。棧橋の水深
は14メートル。着棧場所が4カ所あり、先端には
6万トン級のタンカーが着くことができる。タン
カー用では日本一の長さだ。

同工場の創業は「北海道セメント」という社名
だった1890（明治23）年で、現在稼働する、
わが国のセメント工場で最古である。300年分
といわれる、豊富な石灰岩鉱床を抱える峯朗（が
ろう）鉱山を背後の山中に持ち、全長6・2キロ

メートルのパイプコンベヤーで石灰石を直接工場
へ運ぶ。セメント生産能力は年間390万トンで、
東日本最大規模である。

峯朗鉱山は1872（明治5）年、日本政府か
ら招かれた米国の鉱山学者ベンジャミン・スミス・
ライマンが発見。鉱脈の規模は、幅3キロメー
トル、長さ5キロメートル、厚さは500メー
トル以上という。かつては、石灰石を馬の引く貨車「馬
車」で工場に運んだが、大正期からは電気機関車
を使っていた。

セメント（正式名はポルトランド・セメント）
がイギリスで発明されたのは1824年。日本で
初めてセメントを使ったのは、1861（文久元
年）の長崎製鉄所の工事といわれている。セメント
は輸入品で、非常に高価だったので、国内生産を
試み、1875年、東京深川の官営セメント工場
で日本初の製造が始まった。ちなみに、明治初期
の輸入セメントの値段は、1トン当たり50〜60円
で、これを現在の白米の価格で換算すると、1トン
当たり50万円程度になる。ちなみに「建設物価」（2
021年3月10日調べ）によると、「普通セメント」
の価格は、東京で1トン当たり1万1000円だ。

深川のセメント工場は1883年、工場にコー
クスを納入していた浅野総一郎が払い下げを受け
ている。これが「浅野セメント」になり、総一郎
は「日本のセメント王」と呼ばれるようになる。
この払い下げには、浅野の仕事ぶりを見込んだ、



セメント工場は住宅街に囲まれるようにある。華やかにライトアップされた工場夜景が新たな観光資源になっている。写真は北斗市の富川八幡宮付近の海岸より撮影したもの（写真提供：函館市公式観光情報サイト「はこぶら」、左上も）

浅沢栄一の後ろ盾があったといわれる。

そして翌年、渡島の有力者である種田金十郎が
上磯にセメント工場を資本金5万円で創設した。
しかし、セメントの製造法が国内で知られていな
い時期だったから、期待した性能の製品を作れず、
経営不振に陥る。

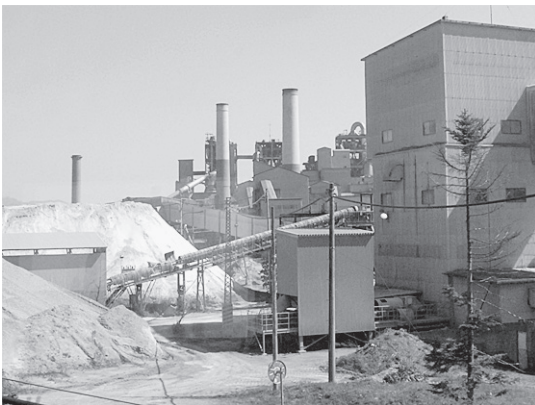
だが1890年、函館の経済人らが設立した北
海道セメントが種田の工場を引き継ぐ。この会社
の発起人や株主は、在京の実業家や官僚と函館の
豪商らで占めることから、当時、コンクリート
工場が飛躍を期待されるベンチャー企業だったこ
とがよく分かる。

新工場はドイツの技術を導入するが、窯の操作
や火の炊き方に慣れるまで失敗の連続で、189





北斗市上磯の海岸から函館湾に突き出す太平洋セメント上磯工場の海上栈橋。タンカーが4隻が着棧でき、製品のセメントや、原料や燃料の石炭などを積み卸しできる2本のパイプ状コンベヤーが通っている



函館から道南いさりび鉄道線の上磯駅を越えると間もなく左手の車窓に大きな工場群が見えてくる。太平洋セメント上磯工場だ。夜は工場夜景が華やかだ

4年に、やっと販売にこぎつけた。セメント製造は好不況の影響を強く受け、やがて北海道セメントは経営難に陥る。1915年、浅野セメントに吸収され「浅野セメント株式会社北海道工場」と改称、さらに戦後の財閥解体で1947年、「日本セメント」に名称変更し、1998年、秩父小野田と合併し、現在の太平洋セメント上磯工場になっている。

震災と大火が、コンクリート普及の契機になった。1891年の濃尾震災や、1923年の関東大震災で耐震性の優位が明らかになり、コンクリート建造物が一気に増えた。函館市内の古いレトロな建物は、明治から昭和初期までの度重なる大火で、建造物の耐火性能に高い関心が寄せられそのような外観構造になったからである。